

自己評価報告書

平成23年4月25日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530540

研究課題名（和文）中国残留孤児の老後の実態に関する研究

研究課題名（英文）Old Age in Japan: The Living Conditions of Japanese Orphans Who Were Born in China and Return to Japan

研究代表者

鍾 家新（Zhong Jiaxin）

明治大学・政治経済学部・教授

研究者番号：10281552

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：中国残留孤児、老後の事態、中国人養父母、高齢化社会、戦争の後始末

1. 研究計画の概要

本研究の目的はつぎの4点に関する調査研究を通して、中国残留孤児の老後問題の特異性や複雑性と国際性を究明することである。

(1) 日本の高齢者福祉研究と中国残留孤児に関する研究の成果を吸収する。

(2) 中国残留孤児の老後生活の実態について、住居状況・収入支出・人間関係・介護利用・余暇活動などから調査を行う。

(3) 残留孤児は産みの親と中国人養父母をもつ。彼らの老い・死を残留孤児がどう受容したかを調査する。特に、中国に残された中国人養父母の老後の実態を明らかにする。

(4) 残留孤児の自身の死や墓などをどう考えているかについて聴き取り調査を行う。

2. 研究の進捗状況

中国残留孤児の老後問題について、中国残留孤児、彼らの日本帰国・帰国後の生活適応を支援したボランティア・関係者・関係機構を中心に聞き取り調査という研究方法をとってきた。本研究課題でこれまで得られた成果はつぎのとおりである。

(1) 中国残留孤児の「祖国」日本への帰国は実質的には日本への移住であり、彼は移民であった。帰国後の最大の壁は日本語であった。帰国後、約6ヶ月の日本語を習得する機会が設けられたが、帰国した中国残留孤児の多くは中年以降の人々であったため、日本語の学習は容易なことではなかった。また、多くの中国残留孤児は東北の農村で育ったため、高い

教育を受けていなかった。そして、日本帰国後、底辺の労働者として働かざるをえなかった。約7割の残留孤児が生活保護の受給者になった。多くの残留孤児は県営や市営住宅で生活してきた。長い裁判闘争をへて、2007年以降新たな生活支援策が実施され、残留孤児たちの老後の所得状況は大幅に改善された。

(2) 1945年8月の戦乱のとき、中国人養父母たちは残留孤児を拾い、我が子のように育った。 possible の限り、教育をさかせ、結婚させた。しかし、多くの残留孤児は豊かな日本社会に憧れ、配偶者と子どもを連れて中国を去った。残留孤児の帰国後、中国人養父母たちに対して、日本政府からの一時補助金の支給や残留孤児からの送金があった。多くの残留孤児は日本で生活保護をうけたため、生活の余裕がなく頻繁に中国人養父母たちと会いに行くことができなかった。以上の諸要因によって、多くの中国人養父母たちは喪失感に襲われ、無力感に陥っている。とくに、自分の子どもをもっていない残留孤児を老後の頼りにしようと人生設計した中国人養父母たちはさらにそうである。中国の敬老院で孤独に老後を送らざるをえなかった。一部の残留孤児は中国で恩知らずの人として軽蔑されている。

(3) 日本帰国後の残留孤児は中国での家族を呼び、日本の国籍をとり日本人化を自主的に進めてきた。多くの残留孤児は生活の基盤を日本に移し、日本で死を迎えたく墓も日本で置きたいと考えている。彼らは日本人として日本社会にとけこもうと努力してきた。しかし、残留孤児たちは中国ですでに社会化が完成したため、実質的には移民であった。まわ

りは彼らを日本人とみない傾向があり、自分は日本人だと考えているため日本における華僑団体に参加する人はほとんどいない。在日の老華僑よりも孤立されている老後生活を送っている。他方、一部の残留孤児は日本社会に適応できないため、家族を連れて中国にもどって生活する現象もみられる。彼らは中国で老後と死を迎えることになる。

3. 現在までの達成度

①おおむね順調に進展している。

本研究課題の当初研究目的の達成度としては、おおむね順調に進展している。その理由はつぎのとおりである。

(1)私は中国残留孤児の帰国後の生活適応を支援するボランティア活動に参加したことが、中国残留孤児との信頼関係を築くことに大いに役立った。

(2)中国残留孤児たちの帰国・帰国後の生活を支援してきたほかのボランティアから多くの手紙や訴訟関係の資料を提供して下さった。

4. 今後の研究の推進方策

帰国後の中国残留孤児の生活は彼らの帰国前の期待との間に落差が大きい。老後の生活も孤独に陥っている。聞き取り調査のとき、多くの内実も隠されていることがみられる。聞き取り調査で得た貴重な第一次的な資料に関して、資料のままでの公表に渋っている残留孤児もいる。今後の研究では、中国残留孤児の老後の実態に関する調査・資料収集を継続的に行い、国民国家化、総力戦、移民、老年学の視点から中国残留孤児の老後を分析してみたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①鍾家新「ボランティアが語る<中国残留孤児>を支援した過程と理由」日本国際客家文化協会『客家与多元文化』[査読あり]第5号、亜洲文化総合研究所出版会、2009年12月、PP. 140～164。

②鍾家新「<中国残留孤児>の帰国と祖国日本での老後」国際アジア文化学会『アジア文化研究』[査読あり]第16号、2009年6月、PP. 41～57。

〔学会発表〕(計2件)

① 鍾家新「<中国残留孤児>の老後の実態と課題」、第20回国際アジア文化学会、2010年6月13

日、国士舘大学。

② 鍾家新「帰国した<中国残留孤児>の老後」、第17回国際アジア文化学会、2008年6月8日、駒沢大学。

〔図書〕(計1件)

① 副田義也(編著者)、遠藤恵子、株本千鶴、牧園清子、樽川典子、鍾家新、赤江達也、東京大学出版会、『内務省の歴史社会学』、2010年、373ページ(PP. 321～342を執筆した)。